

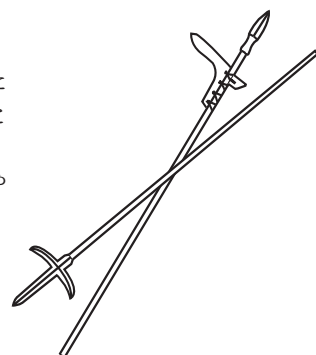
歴史小説!!

歴史小説なんて堅苦しくてつまらない、
なんて思って読まず嫌いしていませんか？
視点と読み方を少し変えるだけで歴史小説を楽しく読むことができます。(MOD)



I.魅力

歴史小説を読むと、教科書で見かけたり受験のために覚えたりしただけだった人物に親近感がわきます。そして彼らに感情移入することで、現代とはまた違う時代の空気に触れることもできるでしょう。
また、小説を通して歴史に触れることで、現代のなにげない習慣や風習、特に慣用語や四字熟語などの由来を知ることができます。



II.よくある悩み

歴史小説を読みたい。読みたいけれど……。そんなとき、あなたを躊躇させているのはいったいなんでしょう？
ここでは、歴史小説を読みたいけれど、どうしても最初の一步が踏み出せない人によくある悩みに答えます。

壺



登場人物があまりに多くて覚えられません。

すべての登場人物を覚えなくてもかまいません。主人公を中心とした物語のカギを握る人物だけを追いかけていけばいいのです。



式



背景説明がつまらないです。

背景説明は教科書的でおもしろくないものです。退屈だと思ったら読みとばしてしましましょう。



参



人物名に見慣れない漢字が使われたり、文章の中で見慣れない熟語が使われたりして読みにくいです。

わからない熟語は文字のイメージから意味を連想したり、情景を想像したりしましょう。ただし、もちろん辞書で調べるにこしたことはありません。名前については、読めなければ記号として認識してしましましょう。



III.おすすめの作品

さあ、歴史小説を読んでみよう、と思ったとき、いったい何から読み始めたらいいのでしょうか？ 普段から本を読む方ではないし、長い作品は読みきれないし……。そこで、ここでは最初に読む歴史小説として執筆者がおすすめする作品を紹介します。



『孫子』

海音寺潮五郎（講談社）

真の兵法ここにあり。

2人の「孫子」の物語。

兵法書「孫子」の空気がユーモラスな筆致で描き出されます。2000年以上の月日を経たなお、読み継がれる「孫子」を身近に感じられる1作。

孫武は妻を恐れながら戦争の研究に明け暮れる田舎地主。その子孫、孫臍は学問嫌いで活発な餓鬼大将。彼らはいかにして、世界で最も有名な兵法家となったのか？「(戦は) 戦って勝つのではなく、すでに勝っているものを自ら確認し、敵に確認させるために行わなければならない」



『長城のかげ』

宮城谷昌光（講談社）

項羽と劉邦、2つの巨星のあいだで瞬く5つの星たちを描く、珠玉の短編集。

著者の人生哲学が物語に彩りを与えています。美しい日本語と、見事な漢字の使い方にも注目。

項羽、劉邦、そしてこの2つの巨星のあいだでまたたく綺羅星たち。あるものは武に生き、あるものは智に生き、あるものは義に生きる。戦乱の世にあって、彼らは自らの信じることを貫かんとする。乱世の果てに、彼らが見るものとは？
「強すぎると、そのすぎた部分が、おのれをそこなう」



『楠木正成』

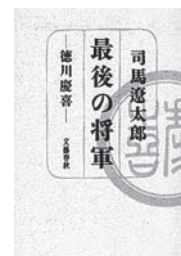
北方謙三（中央公論新社）

「生きる」ということは

「闘う」ということだ。

教科書的な背景説明や難解な漢語は一切なし。テンポのいい文章で、リアルな情景が描かれています。堅苦しい文章が苦手な人にもおすすめ。

生き延びるため、楠木正成は「悪党」となり、同志とともに鎌倉幕府に立ち向かう。目指すところはただ1つ。武士のない世を作ること。果たして彼らの理想は現実となるのか？
「新しい国を作る。この手でだ」



『最後の将軍』

司馬遼太郎（文藝春秋）

家康をも超える英傑が、そこにいた。

綿密な時代考証と鋭い人間考察に基づいて、登場人物の心理がまざまざと描き出されます。人の心はいつの時代も同じだということに気づかされます。

大政奉還を行うことで長く続いた武家支配に幕を下ろした15代将軍、徳川慶喜。彼は無能でも、凡庸でもなかった。新撰組とも、志士たちとも違う、もう1つの幕末。「古来、これほど有能で、これほど多才で、これほど孤独な将軍もいなかったであろう」



IV.終わりに

ここで紹介した読み方や作品は、今までに歴史小説を読んだことのない人が抵抗なく歴史小説を読み始めるにあたって、あくまで執筆者が最善だと思うものです。ほかにもおもしろい小説はたくさんあります。これを出発点にして、自分なりの読み方やお気に入りの作品を探してみてください。この記事が、無限の広がりを持つ歴史の世界へ踏み出すきっかけになれば幸いです。